

## [書評]

Предраг Пипер  
Увод у славистику I

Београд: Завод за уџбеник и наставна средства, 1998. 167 pp.

野 町 素 己

初学者が、これから専攻する予定である学問の入門書を選ぶ際には、どのような本が相応しいだろうか。そのような本の基準として、1) あまり分量的に多くなく、読破するのに大きな困難が伴わないこと、2) 内容が過度に細かすぎず、同時に大雑把過ぎず、バランスよく各々の分野の概観がなされていること、3) 著者の意見が出すぎず、さまざまな分野の基礎的に知っておくべき学説、理論の変遷と現状、主要な学者の見解（およびその批判）が述べられていること、4) その本を読み終えたときに、今後の学習・研究に繋がる情報を十分に含んでいること、以上のことが挙げられるであろう。このようなバランスの取れた本を書くのは、至難の業であることは想像に難くない。本稿で紹介するセルビア科学・芸術アカデミー準会員、ベオグラード大学正教授を務めるプレドラグ・ピペルによる *Увод у славистику I* は、本来、スラヴ学科の1年生の教科書として書かれた薄手の本であり、今後も第2巻の出版が予定されているので現時点では完結していない。また、スラヴィスティカの歴史については、予め前書きにミルカ・イヴィッチの著書 *Правци у лингвистици*（邦訳：言語学の流れ）の該当箇所を参照するように書かれており、詳しい解説はない。しかしスラヴ学の最初歩を説明する本として、本に含まれている内容を判断する限り、概して以上に述べた基準を満たしており、初学者のための教科書として相応しい本と考えてよいであろう。しかし、同時に初学者に対しても大まかすぎる点、不十分な点も指摘できないわけではない。以下に本書の内容を紹介しながら、そういった点を指摘していくが、その内容は第2巻で述べられる可能性があることを、予めお断りしておく。尚、本書はセルビアのスラヴ学研究サイト *Пројекат Растко* でも無料で公開されている。

[http://www.rastko.org.yu/filologija/ppiper-slavistika\\_c.html](http://www.rastko.org.yu/filologija/ppiper-slavistika_c.html)

また著者のプレドラグ・ピペルのプロフィールは、ベオグラード大学のホームページを参照されたい。

[http://www.fil.bg.ac.yu/katedre/ruski/nastavnici/p\\_piper.htm](http://www.fil.bg.ac.yu/katedre/ruski/nastavnici/p_piper.htm)

本書の構成は、「スラヴィスティカ」と題された短い第1章(7-20)、そして「スラヴ人」

と題された長い第2章(21-162)からなる。

第1章では、スラヴィスティカという学問の対象となる分野、その構造、課題、スラヴィスティカとスラヴ・フィロロジエについて簡潔な定義づけ及び説明がなされている。「スラヴィスティカとは何か」という問いに、ピペルは、最も広い意味での定義は「スラヴ語とスラヴ文学に関する学問、スラヴ人の物質及び精神文化、さらに政治、経済といったもの歴史に関する学問の総合体である」とし、一番狭い意味では「スラヴ語に関する、スラヴ語で作り出された文化に関する学問」と述べている。続いて、スラヴィスティカの構造について説明している。この学問に含まれるさまざまな分野の研究は、多くの点において独立しているのではあるが、相互に補完する性質も持ち、その方法論はさらに大きな枠組みの学問に対応することが示されている。例えばスラヴ語学と一般言語学の関係、スラヴ文学研究と文学研究全般を例に、その方法論に対応することなどである。そしてスラヴィスティカの課題については、通時的にも共時的にも、対象をより深く、より徹底的に、より全面的に知るようにすることである。個別の研究課題はそれぞれ存在するが、それと同時にスラヴ人が長きにわたって培ってきた文化を保存するという課題があることを忘れてはならないという。これまで築き上げた文化を尊重することの必要性を認識しないことは、多文化への同化、さらには文化の喪失に繋がることは、歴史の上で多くの例が示しているのであり、この課題は、狭い範囲のスラヴ人だけではなく、非スラヴ人の努力によって実現されるとピペルは指摘する。さらに、あらゆる課題を達成するには、その土台となる各国語—この場合はスラヴ諸語に相当する—の教育が重要な意味を持ち、それには言語学の進歩が密接に関係する。そして言語への正しい認識が、文化形成の土台になることが述べられている。これらの意味を正しく知ることが、将来のスラヴィストの育成に欠かせないとピペルは主張する。

続いてスラヴ・フィロロジエとスラヴィスティカの関係について書かれているが、ピペルの定義によれば、スラヴ・フィロロジエはさまざまな人文科学の複合体で、その対象となるのはテキストである。しかし、現代のフィロロジエは、古い時代のテキストの解釈を中心とした古典的なフィロロジエと異なり、必要となる成長し続ける現代の学問の全てを統合したものであり、そこでは現代に書かれたテキストもその研究対象となることが解説されている。

第2章は「スラヴ人」と題され、次の3節からなる：1) 現代のスラヴ人、2) 民族形成期から中世初期のスラヴ人、3) スラヴ人の文字文化の発達。

最初の節である「現代のスラヴ人」では四つの観点、すなわち1) 言語学的(スラヴ諸語及びその文字)、2) 民族学的、3) 宗教学的、4) 人類学的見地からスラヴ人の特性が解説されている。言語学的観点として、標準語とそのバリエーションの問題について強調されて解説されている。これは現代のセルビアで出版された教科書ならではのことであるが、

これは外国の読者にとって興味深い点である。スラヴ語の文字について、簡潔な紹介と説明がなされている。尚、ピペルは「スラヴ最古の文字はグラゴール文字である」と述べている。実際、グラゴール文字とキリル文字の時間的關係については、前者がより古いという説は多くの支持を得ているが、それまでにはキリル文字をより古いと考えたドプロフスキ、コピタル、さらにシャファリクらの説など、スラヴィスティカの発展とともに変遷を経験した。20世紀後半においてもエミル・ゲオルギエフらはキリル文字がグラゴール文字より古いという説を主張した経緯もあるので、これらの説についても触れてあってもよいと思われる。また、ベラルーシや南スラヴの一部でアラビア文字が使われていたことも指摘されているが、その歴史的経緯には触れられていない。この歴史的背景がわかるような解説が、あるいは関係する参考文献の紹介があったほうが有益であろう。そしてキリル文字の変遷についても軽く触れられているが、書体の問題、そのバリエーションについて言及されていない。また各スラヴ語で用いられるラテン文字とその歴史的変遷が述べられていない。これらの概説は初学者に対しても有益な情報といえよう。

次の節「民族形成期から中世初期のスラヴ人」では、スラヴ人の歴史が解説されている。まずは、非スラヴ人の歴史家らによる主にギリシャ語とラテン語で記述されたスラヴ人に関する記述について、続いて考古学的視点から見たスラヴ人の文化を概観し、スラヴ人の原住地を研究する上での考古学の有用性及びその限界、さらに言語学視点をそれにあわせることの必要性について、考古学的に明らかにされた各文化、そして関係する研究者の説を簡潔にまとめている。ここでは初学者に必要な基本的な情報は含まれてはいるが、各々の文化が存在していたところを示す地図、あるいは副葬品などの絵や写真がないので、文章を読んでいるだけでは、内容の把握をしにくいことに問題があると言える。

続いて、印欧諸語比較文法の観点を踏まえ、スラヴ語の諸語の特性、スラヴ学では大きな問題の一つであるバルト諸語とスラヴ諸語の關係及びそれをめぐる諸説と現状の紹介が要領よくされている。そしてスラヴ祖語について、その初期の段階と後期の段階、各スラヴ語への発展、再構築したスラヴ祖語の大まかな言語的特徴が説明されている。スラヴ祖語の特徴の例として、名詞、形容詞および動詞の形態論について短く書かれているが、セルビア人の読者を対象とするのであれば、各々の言語の該当するカテゴリーのパラダイムを挙げることで、その特徴がより把握しやすくなるであろう。また、音韻・音声研究について、また統語構造の再構築の可能性などは触れられていないのは残念である。

その次は、スラヴ学において長い間論争の対象になっているスラヴ族の呼び名「スラヴ」「アント」「ベンド」などの由来に関する諸説が、続いてスラヴ人の原住地を巡る問題、他言語との接触について、個々のスラヴ人が分裂して原住地から移り住んだ後の歴史についての見解が展開されている。これらの研究には、他民族が残したスラヴ人に関する記述も役に立つことは周知の事実である。アラビア人が残した興味深い文献もスラヴ学には意義

があり言及されてしかるべきであると思われるが、ここでは触れられていない。因みに、これはヤーン・パウリニの著書 *Arabské správy o Slovanoch* (1999, Bratislava) に詳しく書かれている。

この節の最後はキリスト教受容以前のスラヴ人の精神文化（古代の神々、風習など）、受容後にも形を変えて継続した信仰、フォークロアの研究の重要性などに関する概説でまとめられている。

最後の節「スラヴ人の文字文化の発達」では、キリスト教の受容から始まったスラヴ人の文字文化について、キリルとメトディの貢献について説明されている。それに続いてスラヴ世界に於ける文語の存在、及びその意味、そして文学の形成が解説されている。そしてスラヴ語の伝統的な三分類にしたがって、南スラヴ、東スラヴ、西スラヴ各語の歴史と特徴の概説がなされている。ここで興味を引くのは、セルビア語文語についての記述である。ピペルはこの言語の別名としてセルビア・クロアチア語、クロアチア・セルビア語、クロアチア語あるいはセルビア語、セルビア語あるいはクロアチア語、クロアチア語、ボスニア語を挙げている。これは19世紀にバリエントとしての違いの可能性を残した文語が確立したということがその根拠になっていて、純粋な言語学的視点から考えた場合、ピペルの見方は比較的客観的であると言えるであろう。もちろん標準語成立以前にさかのぼった場合には、セルビア・クロアチア語と単一の言語とまとめることには無理が生じる。この問題には、歴史や政治など言語学以外の多様な要因が関係しているので、セルビア人研究者の中でもセルビア語とクロアチア語に関する見解は一致しない。またクロアチア人研究者の多くはクロアチア語という名称を用いるが、その他にも少数派ではあるが、現在でもクロアチア・セルビア語という名称を使う学者もいる。尤も、最近はいわゆるボスニア語、モンテネグロ語の問題も考えなければいけないのであるが、本書では多くは語られていない。この問題については、ピペル別の著書 *Српски између великих и малих језика* (2004, Београд), また思想的にラディカルではあるが、ミロシュ・コヴァチェヴィッチの著書 *Српски језик и српски језици* (2003, Београд) などが、複雑な現状の理解の一助になるであろう。ただし、ピペルの記述に関して明らかなのは、言語と文学の歴史の解説の中にクロアチアの学者の見解などが全く触れられていない。複雑な問題ではあるが、クロアチアでもこの問題に関する多くの出版物がある以上、またこの本が教科書という性質を持つ以上、さまざまな意見の紹介とその検討は必要であろう。

この節では、いわゆるスラヴ・マイクロ文語に関して解説されているのは他の教科書と比べても目新しいことであり、歓迎すべき点である。ただ、この本の内容だけでは当然不十分なので、さらなる文献の紹介が求められる。また、方言の問題もあまり触れられていないが、これは第2巻に含まれることになるであろう。

最後に、スラヴ世界の言語文化はスラヴの各国にとどまらないことはいうまでもない。

亡命者，移民，その子孫は新たな地でも，当然程度の差はあるではあろうが，その言語を使用した生活を送るわけである。その文化，そして彼等の言語についての研究も既に多く出ているので，そのような研究の必要性が，現代のスラヴ研究にあることを述べる必要もあるように思われる。

これまで内容を紹介しつつ，必要に応じて自分の見解を述べたが，本書は少ないページ数にも関わらず，基礎的な情報をバランスよく，かつ明快に解説した有益な本であることには疑う余地がなく，初学者に薦められる本である。現在執筆中であるという，第2巻が世に出るのが待ち遠しい。